人間科学部「社会調査法（含む実習）」の活動報告

人間科学部　人間科学科　清水 和明

人間科学部では学部を開設して以来、一般社団法人社会調査協会が認定する「社会調査士」の資格が取得できます。社会調査士の資格取得に向けた仕上げの科目である「社会調査法（含む実習）」では、アンケート調査を行い、その結果を統計解析して分析する質的調査と、特定の調査対象地域での観察やヒアリング調査などを行い、その結果を考察する質的な調査を開講しています。２０２２年度は、平井誠先生と私がこの科目を担当し、神奈川大学がある横浜市を対象地域に設定して、質的調査を行うことにしました。授業の運営にあたっては、非常勤助手の青木淳弘先生（当時）と池田和子先生にも加わって頂き、学生たちの調査実施に向けたサポートをお願いしました。横浜市に関する基礎資料を収集して、地域に対する理解を深め、関連する資料を収集し、学生たちの興味関心に応じて文献の講読を進め、調査テーマを確定していきました。最終的に、「横浜市の農地制度」と「横浜市の子育て支援の現状と課題」について調べることになり、この２つのグループで調査を進めました。調査にご協力頂いた皆様からは、学生たちの頑張りを評価して頂きました。学生たちにとって自信になったと思いますし、この経験を今後の生活に生かしてほしいと思います。

調査を進めるにあたっては、横浜市役所の皆様、ＮＰＯ法人「びーのびーの」の皆様、ＮＰＯ法人「田村明記念・まちづくり研究会」の田口俊夫副理事長にご協力頂きました。改めて御礼申し上げます。

「横浜市の都市農業と農地利用」を調べて

人間科学部　人間科学科４年　佐藤 香波

私は社会調査士資格取得の為、本実習を履修しました。資格課程プログラムのレールの上を1年生からそのまま歩いてきたので、3年生の1年間の実習がどんなものかは全く把握せずに受けたのですが、卒業論文レベル、もしくは、実際の調査を何回も重ねることなどの、卒論以上のことをしなければいけないことを初回の授業で知り、絶句したことが懐かしいです（笑）

前期の前半では、履修者各々が調査してみたい事柄について先行研究を調べ、発表し、それに基づいてグループ分けが行われました。私は「横浜市民のレジャー先調査」をやってみたく、「人々は余暇時間で何をしているのか」という論文を中心に、レジャー関係の先行研究をいくつか調べました。ここから実際にグループ分けが行われたのですが、レジャー関連やそれに近い事柄に興味関心を持っている履修生がいなかったので、既にグループ分けされているチームの中から一番興味関心があるところに合流する形で調査がスタートしました。

私のチームには、横浜市のみどり税、横浜市の街路樹の整備、港北ニュータウンの開発に関心を持っている学生が集まっていました。最終的にこのチームで何について調べるか検討していく中で、「港北ニュータウンを開発する際に、横浜市が独自で「農業専用地区」という制度を制定して、都市の開発を進めていく中でも、緑を残そうと動いていた」という事実を知りました。これを受けて「横浜市の都市農業と農地利用」について深堀りしていったら面白そう！という結論に至り、調査活動のテーマとしました。

私は農業について微塵も興味がありませんでしたし、農業についてなんて知ろうともしていなかったのですが、「横浜市の都市開発の中に、農業の視点が存在していた」という関係性が大変面白く、チームの中でもかなりのめりこんで先行研究などを調べていました（笑）。農業の用語や知識自体が非常に難しいこともあったため、授業が終わった後に、メンバーと1時

間近く話し込んだこともありましたし、長期休みも定期的にチームで集まって様々なことを調べました。

実際の調査では、横浜市環境創造局のみどりアップ推進部環境活動支援センター長の平山さんをはじめ、環境創造局の担当者の方々にご協力を頂きました。横浜市の農業全体のお話、横浜市北部の農業専用地区について、農業の後継者・新規参入についてのお話をそれぞれ2時間近くインタビューすることができ、横浜市の農業についての実態を明らかにし、今後について考察することができました。

計3回のインタビュー調査を踏まえ、秋から冬休みにかけては、約2万5千字もの調査報告書の執筆に向け、メンバーと何度も打ち合わせを重ね、先生方に多くのアドバイスを頂きながら、完成させることができました。

この1年間の実習に対する取り組みをNPO法人「田村明記念・まちづくり研究会」の皆様にも高く評価して頂き、みなとみらいキャンパスで「成果報告会」を開催しました。NPO法人「田村明記念・まちづくり研究会」の皆様、横浜市環境創造局の平山センター長、小室さんの前で発表させて頂いたことは大変緊張しましたが、大変貴重な経験をさせて頂いたことを同時に噛みしめていました。

インタビュー調査の様子（於　横浜市環境創造局環境活動支援センター）

成果報告会の様子（マイクを持っているのが筆者）

成果報告会を実施できるほど、ここまで質の高い実習および調査を実施できたのは、本実習を支えてくださいました、平井先生、清水先生、青木先生、池田先生の存在あってこそのものです。毎回の授業でも様々なことを相談させて頂きましたし、授業外の時間でも一緒に打ち合わせに参加してくださったこと、感謝の気持ちでいっぱいです。

この実習がなければ、農業について知ることもきっとありませんでしたし、何より、農業関係の方と関わることもなかったと思います。この実習で経験したことは、毎回新しい知識や知見ばかりで、非常に有意義で貴重な経験となりました。この実習活動において関わってくださいました、すべての皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。1年間ご協力くださり、誠にありがとうございました。

成果報告会後に参加者で記念撮影をしました

「横浜市の子育て支援の現状と課題」を調べて

人間科学部　人間科学科4年　絞張 美波

私は「横浜市における子育て支援の現状と課題」をテーマに、学生4名で情報収集、現地調査、調査結果のまとめ、報告書の執筆を行いました。

私のグループが横浜市の子育て支援を調査テーマに決定するまでには、4つの段階がありました。第1段階では、当科目を履修する全ての学生がそれぞれの興味関心を提示しました。興味関心のある事柄をパワーポイントにまとめて発表した後、興味関心が似通った学生同士がまとめられグループを結成しました。第2段階では、グループメンバーの興味関心のある事柄から共通のキーワードを探しました。私たちのグループでは、地域コミュニティ、社会福祉、社会的マイノリティへの支援がキーワードとしてあがりました。第3段階では、キーワードを基にグループで調査できそうなことについて話し合いました。その結果、横浜市は困っている人に対してどのような支援を行っているのか、支援にはどのような組織が関わっているのか、について調査できそうだという結論に至りました。第4段階では、具体的なテーマの決定を行いました。第3段階での「困っている人」の具体的な属性候補として、子育て世帯、高齢者、外国人があがりました。調査対象地域が横浜市であることから、大都市特有の待機児童問題や核家族世帯の子育て支援について調査することになりました。

実際に活動を開始すると、多くの困難に直面しました。まずは事前の情報収集です。子育て支援に関する先行研究や横浜市の子育て支援施策など、たくさんの文献に目を通さなければならず、情報の海に溺れそうになりました。そこで、4人のメンバーで情報収集を分担し、逐一情報共有を行いました。次に、現地調査で使用する質問紙の作成方法です。どのような質問をするか、どのような単語を使って聞きたい内容を表現するか、どのような順番で質問を並べるか等、細かい点を何度も何度もブラッシュアップしながら質問紙を作成しました。そして、現地調査前のボランティア参加です。私たちのグループでは、横浜市内で子育て支援を行うNPO法人にインタビュー調査を行ったのですが、ただインタビューを行うのではなく、事前に2～3回ほど施設内でボランティアを行う必要がありました。NPOスタッフへの1回のインタビューで終わってしまっては現場の実際の状況が掴めないため、学生自身が親や子どもと触れ合うことを通じて現場を体験することになったのです。調査日程が遅くなると報告書の執筆も遅くなるため、全体のスケジュールに影響が出ます。そのため、なるべくメンバーでボランティアを分担して行うことで、無事インタビュー調査を迎えることができました。

この調査を通して、初対面の人と話す時のポイントを学ぶことができました。そのポイントとは、「話すためにはまず聴くことから」です。私たちの調査では、子育て支援施設の利用者、NPO法人のスタッフ、そして横浜市こども青少年局の方々にお話を聞く機会がありました。ほぼ初対面の方に具体的なお話を聞かなければならなかったのですが、序盤はどう話を切り出せばよいか、何を話せばよいか、全く分からず思い通りに話すことができませんでした。そこで、相手の方が答えやすい質問から始め、にこやかに相槌をすることを心掛けました。その結果、相手の方に気持ちよく話して頂き、自身が無理に話そうとしなくとも自然と会話が続くようになりました。

この講義を履修し、実際に調査を行うことによって、社会調査の手法を実践的に学ぶだけでなく、グループで分担しながら作業を進めるチームワーク、逐一「報連相」を行うこと、先が見えない袋小路に入り込んでしまった際の対処法など、社会人に必要な能力を鍛えることができました。講義を履修しはじめた4月時点ではどこか現実味の無かった報告書の執筆ですが、最終的に、4人で約2万字の報告書を書き上げることができ、非常に達成感を覚えました。この経験を自身の卒業論文執筆にも生かしていきたいです。

成果報告会の様子（マイクを持っているのが筆者）

苦労の末完成した報告書